

目指せ世界遺産！
鳴門の渦潮学～語り部～養成講座

第1回 ① 原始・古代・中世の鳴門海峡

〔平成29年8月16日(水) 於鳴門市うずしお会館〕

(公財)徳島県埋蔵文化財センター 福家 清司

原始・古代・中世の鳴門海峡

目次

はじめに

1 原始時代の鳴門海峡

(1) 旧石器・縄文時代の遺跡 (2) 弥生時代の遺跡 (3) 古墳時代の遺跡

2 古代の鳴門海峡

(1) 「古事記」「日本書紀」と鳴門海峡 (2) 律令制度下の鳴門海峡 (3) 平城宮出土木簡にみる鳴門海峡の産物 (4) 鳴門海峡地域の「海賊」 (5) 古代の遺跡

3 中世の鳴門海峡

(1) 荘園と地頭 (2) 鎌倉幕府の守護支配と鳴門海峡 (3) 細川氏の分国支配 (4) 中世の交通と鳴門海峡 (5) 文安2(1445)年「兵庫北関入船納帳」にみる鳴門海峡の港 (6) 文安2(1445)年「兵庫北関雑船納帳」にみる鳴門海峡の港 (7) 源平合戦と水軍領主 (8) 南北朝の争乱と水軍領主 (9) 室町・戦国期の安宅水軍 (10) 「四国征伐」と鳴門海峡 (11) 鳴門海峡地域の中世城館跡

おわりに

はじめに

1 「鳴門の渦潮」発生メカニズム

☞ 地形(含む海底地形)と海流(潮汐)

2 「鳴門海峡」の岬地形

☞ 海峡部の幅 = 約1,340m

☞ 海峡の海底地形 = 深さ約90mのV字峡谷、海釜(北側約220m、南側約160mの深さ)

3 最終氷期以降の「鳴門海峡」形成過程

* 典拠; 石田啓祐ほか「地形・地質から見た鳴門海峡の成立」(鳴門市総合学術調査報告『阿波学会 紀要』第61号、2017年3月)

① 最終氷期極相期(約2万年前) = 旧石器時代

☞ 海面は現在より約125m低い。

☞ 「鳴門海峡」は陸化。

② 間氷期(約1.03万年前) = 縄文時代

☞ 海面は現在より約40m低い。

☞ 紀伊水道から「鳴門海峡」を通過して播磨灘に海水が侵入。

☞ 「鳴門海峡」成立。

③ 間氷期(約0.97万年前) = 縄文時代

☞ 海面は現在より約30m低い。

☞ 大阪湾から明石海峡を通過して播磨灘に海水が侵入。

☞ 「鳴門の渦潮」形成の条件整う。

1 原始時代の鳴門海峡

(1)旧石器・縄文時代の遺跡 (特徴)

①旧石器時代・縄文時代
ともに遺跡数は極めて
少ない。

②鳴門海峡地域は定住の
場としてではなく、一時的
な食料獲得の場として旧
石器・縄文時代人が活動
か。



1 原始時代の鳴門海峡

●鳴門市

○旧石器時代の遺跡

- ・小鳴門海峡海底遺跡(小鳴門海峡 小鳴門橋 鍋島) = サヌカイ製石核・縦長剥片・横長剥片など出土

○縄文時代の遺跡

- ・亀浦遺跡(鳴門町土佐泊浦字福池) = 集落遺跡か。
- ・鳴門日出貝塚(瀬戸町堂浦字大日出)

●南あわじ市

○旧石器時代の遺跡

- ・長原遺跡(賀集長原)などで国府型ナイフ出土。

○縄文時代の遺跡

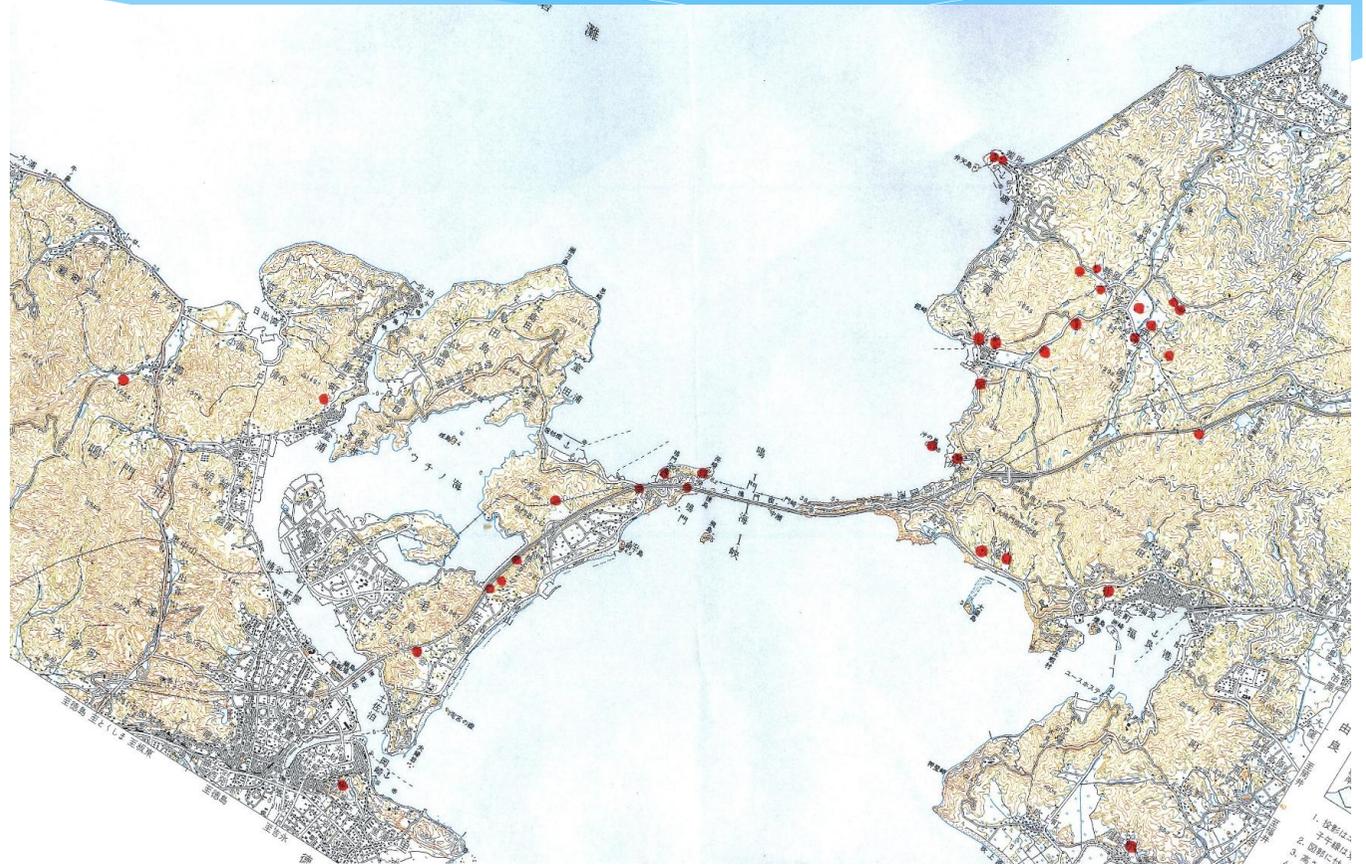
- ・おのころ島遺跡(榎列下幡多) = 中期の土器出土。
- ・九歳遺跡(阿万東町) = 晩期の集落跡検出。
- ・大野遺跡(賀集八幡南) = 晩期の土器、石鏃出土。
- ・立石遺跡(市三條) = 石鏃出土。
- ・嫁ヶ渚遺跡(賀集立川瀬) = 石鏃出土。

1 原始時代の鳴門海峡

(2) 弥生時代の遺跡

(特徴)

- ①縄文時代に比べて、飛躍的に遺跡数が増加。
- ②弥生時代に普及した稲作が困難な場所に立地する遺跡が多い。
- ③鳴門海峡付近の遺跡では、主に貝・海藻・魚などの採集・捕獲、塩の生産などを行った人々が居住か。



1 原始時代の鳴門海峡

○集落の成立・展開

●鳴門市

- ・鳴門公園遺跡〈旧大毛遺跡〉(鳴門町土佐泊字福池) = 弥生中期の土器・石器出土。
- ・土佐泊孫崎遺跡(鳴門町土佐泊浦字福池) = 散布地
- ・土佐泊浦福池遺跡(鳴門町土佐泊浦字福池)
- ・堂浦網代遺跡(瀬戸町堂浦字大日出) = 弥生時代～古墳時代、製塩遺跡。

●南あわじ市

- ・九歳遺跡(阿万東町) = 晩期の集落跡検出。
- ・岩谷遺跡(福良仁尾) = サヌカイト製石鏃・弥生中期の土器など出土。
- ・高萩遺跡(賀集福井) = 弥生時代中期～後期の竪穴住居検出。
- ・伊加利沖田遺跡(南あわじ市伊加利沖田) = 弥生時代～室町時代。古墳時代の土師器がまとまって出土。

1 原始時代の鳴門海峡

- 井手田遺跡(阿万上町～阿万下町) = 弥生・古墳・奈良・鎌倉の各時代。他地域との交流を示す遺構・遺物出土。
- 衾つノ木遺跡(賀集生子) = 弥生時代終末期の土器出土。
- 北田遺跡(阿万東町) = 弥生・平安・中世の各時代の遺物出土。
- 初田遺跡(阿万塩屋) = 弥生・平安の各時代の遺物出土。
- 河内遺跡(阿万上町) = 弥生・中世の各時代の遺物出土。
- 佐古谷遺跡(阿万上町) = 散布地。
- 志知川沖田南遺跡(南あわじ市志知沖田川) = 水田跡検出。

1 原始時代の鳴門海峡

(3) 古墳時代の遺跡 (特徴)

①小規模な円墳又は
石棺のみの古墳が
中心。

②大部分が海に面し
た丘陵上に立地し
ていることから、被
葬者は海を生活の
場とした人々(海民)
であったと考えられ
ている。



1 原始時代の鳴門海峡

○集落遺跡

●鳴門市

- ・土佐泊浦大毛遺跡(鳴門町土佐泊浦字大毛)
- ・室北方遺跡(瀬戸町室字深ヶ谷)
- ・大島田遺跡(瀬戸町大島田字上傍示)
- ・中島田遺跡(瀬戸町中島田字大畑他)

●南あわじ市

- ・みのこし遺跡(阿万東町) = 古墳時代～平安時代。

○製塩遺跡

●鳴門市

- ・堂浦日出遺跡(瀬戸町堂浦字日出・大日出) = 大規模な土器製塩(5世紀頃)
- ・室南方遺跡(瀬戸町室字中ヶ谷)

●南あわじ市

- ・九歳遺跡(阿万東町)

1 原始時代の鳴門海峡

○古墳

●鳴門市

- 亀浦北山古墳群(鳴門町土佐泊浦字福池)
- 納言山古墳群(鳴門町土佐泊浦字大毛)
- 竹島古墳群(鳴門町高島字竹島)
- 松瀬崎古墳群(鳴門町土佐泊浦字土佐泊)
- 田ノ浦古墳群(瀬戸町室字田ノ浦)
- 室古墳群(瀬戸町字在所谷)
- 阿波井神社裏山古墳群(瀬戸町堂浦字阿波井)
- 中島田古墳群(瀬戸町中島田字東山)
- 島向古墳群(瀬戸町北泊字北泊他)
- 北泊古墳群(瀬戸町北泊字北泊)
- 日出古墳群(瀬戸町堂浦字日出)

1 原始時代の鳴門海峡

●南あわじ市

- 西北山古墳(賀集八幡北)
=直径15m前後の円墳。6世紀後半頃。
- 丸田古墳(南あわじ市阿万丸田)
- 沖ノ島古墳群(阿那賀伊毘沖ノ島)
=伊毘漁港から100m沖合の小島。頂上部に18基の小円墳が密集。発掘調査によって、右の写真のような棒状石製品・軽石製浮子・土錘・イダコ壺・鉄製釣り針などの**漁具が副葬**されていることが確認された。(出典;『日本の古代遺跡3兵庫南部』保育社、1984年)



2 古代の鳴門海峡

(1)「古事記」「日本書紀」と鳴門海峡

- ・淡路島南部の海民伝承と「国生み神話」
- ・「早吸之門」と「珍彦(うずひこ)」

(2) 律令制度下の鳴門海峡

○南海道と鳴門海峡

- ・経路＝紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊予・土佐
- ・駅＝平城京→紀伊橋本→紀伊国府→紀伊加太→淡路由良→淡路国府→淡路福良→(鳴門海峡)→阿波牟屋→阿波石濃→阿波郡頭→(阿波国府)→讃岐大塚→・・・→讃岐国府→・・・→伊予国府→・・・→土佐国府

○「牟屋」

- ・「阿波国風土記逸文」(仙覚『万葉集注釈』巻第2)の「中湖トイフハ、牟夜戸与奥湖中ニアルガ故、中湖ヲ為名」中にみえる「牟夜戸」に同じ。現在の撫養。

○国郡制と鳴門海峡

- ・阿波国＝板野郡余戸郷
- ・淡路国＝三原郡阿万郷

2 古代の鳴門海峡

(3)平城宮出土木簡にみる鳴門海峡の産物

●鳴門市

＝「阿波国進上御贄若海藻壺籠 板野郡牟屋海」

●南あわじ市

＝A・「淡路国三原郡阿麻郷戸主海部□麻呂戸口同姓嶋麻呂調塩三斗」

・「○○○天平宝字五年十月四日」

B・「淡路国三原郡阿麻郷戸主丹比部足・□同姓蓑麻呂調塩三斗」

・「天平宝字五年」

(4)鳴門海峡地域の「海賊」

「(承平四年十二月)三十日。雨風吹かず。海賊は、夜歩きせざなりと聞きて、夜中ばかりに船を出して、阿波の水門をわたる。夜中なれば、西東も見えず。男、女、からく神仏を祈りて、この水門をわたりぬ。寅卯の時ばかりに、沼島といふところを過ぎて、たな川といふところをわたる。

(略)今は和泉国に来ぬれば、海賊物ならず。」 (新編日本古典文学全集『土佐日記・蜻蛉日記』より)

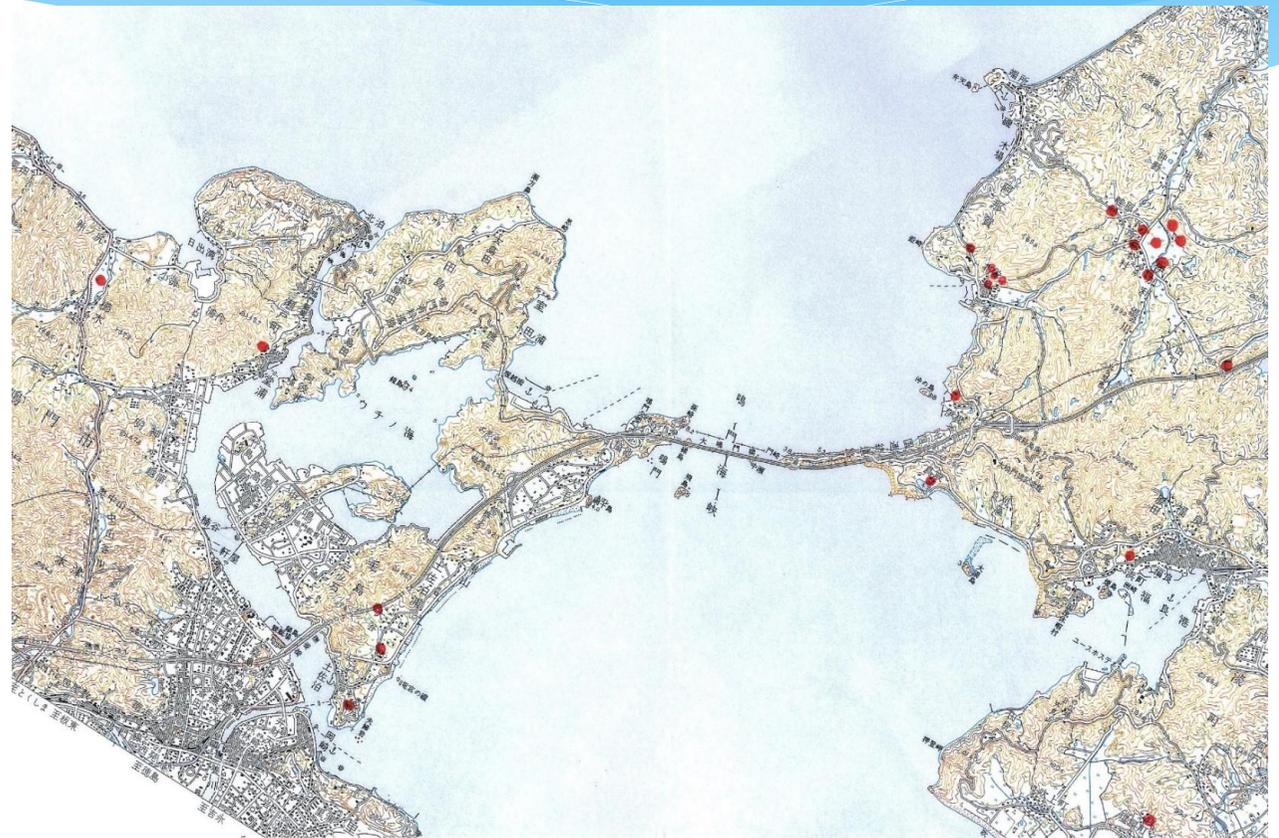
2 古代の鳴門海峡

(5)古代の遺跡 (特徴)

①淡路島ではすでに古墳時代から活発に製塩が行われていたが、奈良時代になると、その中心は南あわじ市域に移る。

・九歳遺跡(阿万東町)

＝当遺跡では古墳時代後期頃から塩の生産活動がみられ、奈良時代になると、官衙的性格をもった大規模製塩集落となった。当遺跡は奈良時代の「御食国(みけつくく)」淡路を支えた「三原海人」の遺跡と考えられている。



3 中世の鳴門海峡

(1) 荘園と地頭

●鳴門市

- 泊荘 = 大永3(1523)年の大代勝福寺過去帳に「泊庄」とみえるのみで、その実在も含め、実態不詳。
- 人丸影供領里海荘 = 確実な文献史料にはすべて「讃岐国里海庄」とあるが、香川県内の比定地不詳。
 - * 沖野舜二氏は里浦町に比定。里浦には柿本人麻呂を祀る「人丸神社」がある。また、江戸時代初期、堂の浦付近に「里海」と記した絵図があることなどから、鳴門海峡に面した地域の可能性も残されている。

●南あわじ市(←貞応2(1223)年「淡路国大田文」)

- 得長寿院并八幡宮領阿万荘 = 前地頭兵衛尉以忠、国御家人、新地頭木村太郎、田103丁 本荘100丁 沼島3丁、畠、浦2所、諭鶴羽山1所、熊野権現本山
- 高野寶幢院領賀集荘 = 前地頭左近将監忠光、国御家人、新地頭船越右衛門尉、田120丁、畠
- 高野山領福良荘 = 前地頭兵衛尉以忠、国御家人、新地頭船越右衛門尉押領、田20丁、畠、浦1所

3 中世の鳴門海峡

(2) 鎌倉幕府の守護支配と鳴門海

● 鳴門市

・佐々木経高→(承久の乱で院方として戦死、改易)(承久の乱後)小笠原氏→(阿波小笠原氏歴代)

● 南あわじ市

・佐々木経高(同前)(承久の乱後)長沼氏→(淡路長沼氏歴代)

(3) 細川氏の分国支配

● 鳴門市

・阿波国守護＝細川和氏→頼春→頼之→頼有(康暦の政変により没収、一時、別系統の正氏へ)
(康暦の政変後)義之→(阿波守護家細川氏歴代)

● 南あわじ市

・淡路国守護＝細川和氏→師氏→氏春(康暦の政変により没収)(康暦の政変後)氏春→(淡路守護家細川氏歴代)

3 中世の鳴門海峡

(4)中世の交通と鳴門海峡

○原作高野山正智院学僧道範阿闍梨『南海流浪記』(群書類従本)

「(仁治四年二月)十日、**フクラヲタチ阿波ノ戸ヲワタリテ、佐伊田ニオル**。海路三里余、シマジマ入江入江ノ有様、悦目養意。舟ヲオリテ阿波国坂東郡**大寺**ニ宿ス。

(中略)

同(八月)八日立白山至引田。路六里。同九日立**引田越阿波大坂至紀津**。路六里。即日酉始乗船、渡**牟野口**村移居(付**福良**か)。海路四里。即子時許至淡路国**賀集**。一里。」

⇒ ・(往路)福良で乗船、佐伊田(斎田)で下船。

・(復路)讃岐白山から引田までは船。引田で下船して、陸路大坂越え。紀津(木津)で乗船。福良で下船。

☞引田から撫養までは小鳴門海峡經由海路約26km、陸路約34kmであるが、**陸路を選択**。

3 中世の鳴門海峡

○聖護院准后『後法興院記』明応2(1493)年12月3日条

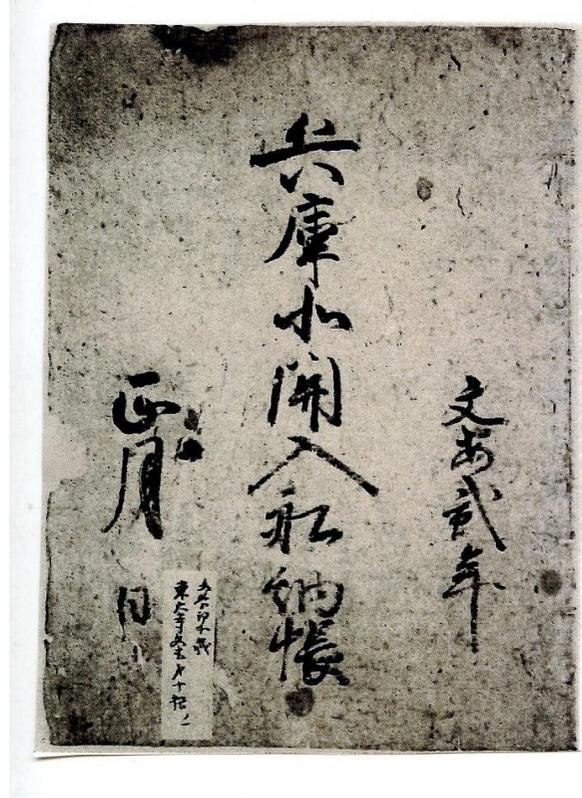
「細河伊豆守政誠来、聖門備前児島ニ下着以後、就彼社領、与讃州一家上野依執合、一向留通路及難儀由風聞間、昨日仰伊豆守相尋讃州処、去十九日**自児島讃岐之ヒケ**夕へ下着、慈雲院**進御迎**せウス仆云在所ニテ致御越年之用意之由有注進之由有返答。令祝着者也。」

⇒聖護院門跡道興、備前児島(岡山県倉敷市)で乗船し、讃岐引田(香川県東かがわ市)で下船。勝瑞の細川成之、これに迎えを出す。

☞児島あるいは引田から撫養、勝瑞に向かう船便は選択されず。その理由？

3 中世の鳴門海峡

(5)文安2(1445)年『兵庫北関入船納帳』にみる鳴門海峡の港



文安2(1445)年『兵庫北関入船納帳』(燈心文庫 林屋辰三郎編 『兵庫北関入船納帳』中央公論美術出版、1981年)

3 中世の鳴門海峡

二月三日 あなか	三原六十石	二百卅文	形部三郎	同(二郎三郎)
六月廿八日 武屋	小麦六石サヌキ斗	百廿文 七月二日	四郎衛門	木屋
七月二日 土佐泊	藍四石 大麦十五石サヌキ斗 小麦十石	二百七十文七月四日 同	兵衛左衛門	木や
七月廿四日 □(武)屋	藍卅石	三百廿文七月廿六日	兵衛左衛門	道祐
十一月廿七日 土佐泊	米八石サヌキ斗 米四石	百五十文同日(十二月十二日) 百文同日	七郎左衛門 同人	木や
十二月廿九日 あなか	米廿二石	二百十五文当日	太郎二郎	木や

3 中世の鳴門海峡

(6)文安2(1445)年『兵庫北関雑船納帳』にみる鳴門海峡の港

二月二日

四十五(文) 木船木八十把 木津六郎二郎

二月八日

四十五文 木船海士九郎二郎 四十

三月九日

四十五文 あなか二郎太郎 大木七十把

三月廿八日

四十五文 木四十ハアマノ九郎二郎

八月十一日

四十五文北泊 木卅ハ

九月一日

四十五文衛門五郎木船大木六十ハ 右や

3 中世の鳴門海峡

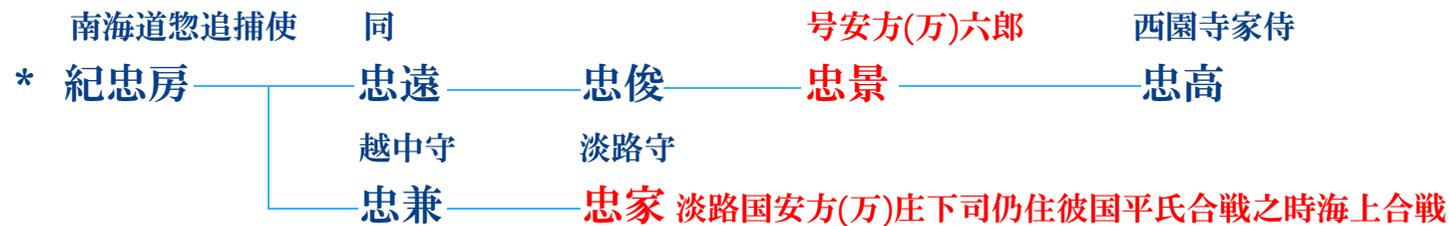
(7)源平合戦と水軍領主

①「阿波・讃岐の在庁」(『平家物語』「六箇度軍」)

「平家福原へ渡り給ひて後は四国の兵も従ひ奉らず。中にも阿波、讃岐の在庁ども、平家を背いて源氏に付かむとしけるが、(略)門脇の中納言、子息越前の三位、能登守父子三人、備前国下津井にましますと聞こえしかば、討ち奉らんとて兵船十艘でよせたりけり。(略)四国の兵ども、一目ばかりに矢一つ射て、退かんとこそ思ひけるに、手痛う攻められ奉つて、敵はじとや思ひけん、遠負にして引き退き、都の方へ逃げ上がるが、淡路国福良の泊に着きにけり。」

②「淡路国の住人安摩の六郎忠景」

「又、淡路国の住人安摩の六郎忠景、平家を背いて源氏に心を通はしけるが、大舟二艘に兵糧米、物具積みて、都の方へ上るほどに、能登殿、福原にてこれを聞き、小舟十艘ばかり押し浮かべて追われけり。安摩の六郎、西宮の沖にて返し合はせ防ぎ戦ふ。」



3 中世の鳴門海峡

(8) 南北朝の争乱と水軍領主

①「安間・志知・小笠原ノ一族」(『太平記』「義助予州下向事」)

「去程二四国ノ通路開ヌテ、脇屋刑部卿義助ハ、暦応三年四月一日勅命ヲ蒙テ、四国西国ノ大将ヲ奉テ、下向トゾ聞ヘシ。(略)熊野人共、兵船三百余艘調ヘ立、淡路ノ武島(沼島)ヘ送ル。此ニハ**安間・志知・小笠原ノ一族共**、元来宮方ニテ城ヲ構テ居タリシカバ、様々ノ酒肴・引出物ヲ尽シテ、三百余艘ノ舟ヲ沙ヘ、備前ノ児島ヘ送奉ル。」

○「安間氏」=阿万荘下司阿万氏

○「志知氏」=「淡路国三原郡神代郷志知」を本貫とした土豪か。淡路国在庁勢力か。

○「小笠原氏」=阿波守護小笠原氏一族。鳴門北灘の小笠原氏又は安宅氏か。

②「安宅一族」(安宅文書)

淡路国**沼島**以下、**海賊退治**事、早廻籌策、可致忠節之状如件、

観応元年六月三日

(花押)「義詮」

安宅一族中

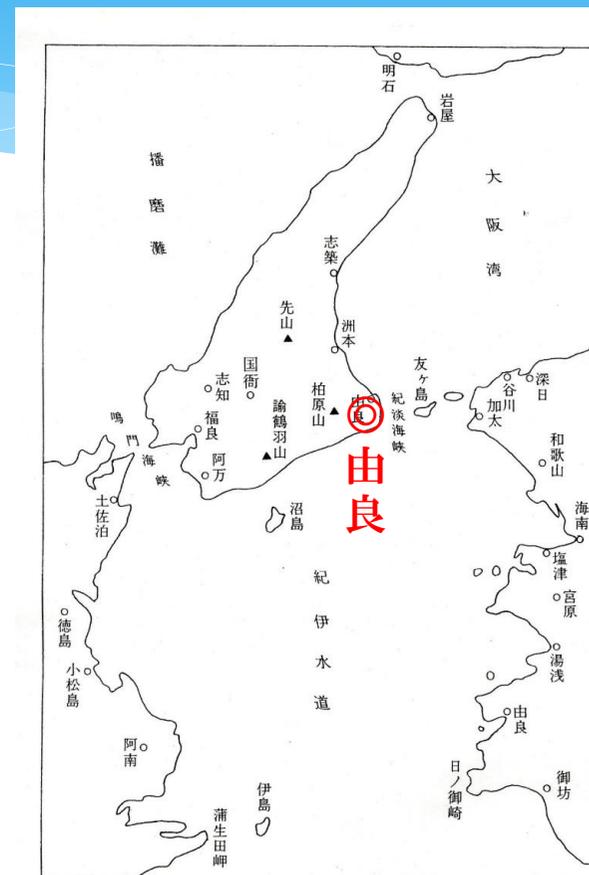
○安宅氏=阿波国守護小笠原氏一族(『安宅一乱記』)

○本貫地=紀伊国牟婁郡安宅荘(和歌山県西牟婁郡白浜町)

3 中世の鳴門海峡

(9) 室町・戦国期の安宅水軍

- 南北朝期に淡路由良に活動拠点構築か。
- 淡路守護細川氏・阿波守護細川氏の水軍として活動。
 - ☞大阪湾・紀伊水道の中小水軍領主を掌握か。
- 「兵庫北関入船納帳」= 由良船による「阿波塩」「藍」「材木・樽」搬送
 - ☞大阪湾・紀伊水道・南海ルート(太平洋航路)を商圏とする商船活動掌握か。
- 三好長慶実弟冬康、安宅氏へ養子に入る。
 - ☞三好氏による安宅水軍掌握。
- 畿内から四国東部を版図とする三好政権にとって、淡路と安宅水軍は重要な位置を占める。



阿淡・紀淡海域略図

3 中世の鳴門海峡

(10)「四国征伐」と鳴門海峡

①畿内の情勢＝織田信長と三好政権敵対。

☞信長、三好政権の本国阿波を攻める長宗我部氏支援。

②信長、四国政策変換

☞阿波・讃岐、早くに信長に味方した三好康長へ。元親には土佐一国を安堵。

☞元親は明智光秀を仲介者として、信長と交渉。

③織田信長による「四国征伐」

○天正10(1582)年5月＝信長、織田信孝に四国出陣を命じる。

○ 6月＝本能寺の変

☞背景に四国政策をめぐる信長と光秀間に軋轢ありとする見解が有力。

○ 8月＝中富川の合戦

☞土佐泊城の森氏を除いて、阿波国は元親の支配下へ。

④豊臣秀吉による「四国征伐」

○天正13(1585)年5月＝秀吉、羽柴秀長に四国征伐を命じる。

○ 7月＝福良で舟揃えし、大挙して鳴門海峡渡海。土佐泊城に入った後、木津城攻撃。

○ 7月＝長宗我部元親、秀吉と和睦し、土佐へ退く。

○ 6月＝蜂須賀家政、阿波国を拝領。

3 中世の鳴門海峡

(11) 鳴門海峡地域の中世城館跡

● 鳴門市

- 土佐泊城跡 (鳴門町土佐泊浦字土佐泊)
*「森志摩守は撫養脇に土佐泊と申す山に籠居て阿波の牢人衆を抱置、志和具・小豆島・播磨灘・和泉灘へ警固をあげ、ふたうらにして兵糧を取、牢人衆をちらさず候、唐国は不存、志摩守のようなる兵者は、日本には不承候。」(『昔阿波物語』)
- 里浦城跡 (里浦町里浦字平松)
- 北泊城跡 (瀬戸町北泊字北泊)
- 撫養城跡 (撫養町林崎字北殿町)

● 南あわじ市

- 郷殿城跡 (阿万上町)
- 塩屋古城跡 (阿万塩屋)



おわりに

1 原始時代の鳴門海峡

☞「海人」の生活の舞台

2 古代の鳴門海峡

☞南海道の主要交通路～福良・撫養～

☞塩・わかめ～都へ貢進された産物～

3 中世の鳴門海峡

☞細川氏分国

☞水運活動と水軍「安宅氏」

☞信長・秀吉の四国征伐の進軍ルート